

大蕨の棚田 再生へ実り

消費者や地元農家ら協力

コメに付加価値効果じわり

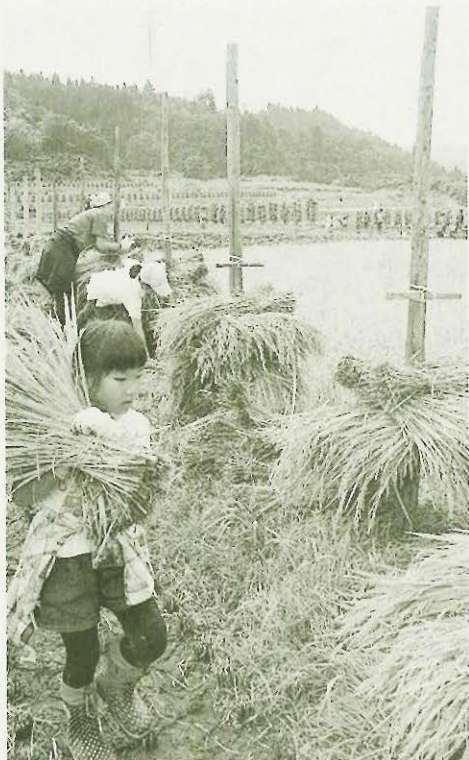
国の棚田百選に選ばれた山辺町の「大蕨の棚田」を守ろうと、消費者や地元農家らが5年前から再生事業を進めている。農協やモンテデイオ山形も協力。生産から販売までの連携で、消えかかっていた棚田がよみがえりつつある。



モンテ棚田米（右）と山形県大蕨棚田米

リポート やまがた

秋晴れの9月中旬。山辺町大蕨の棚田は、刈り取った稲を杭に干す杭掛け作業に精を出す人たちがにぎわった。山形市から母親と来



た中島咲耶ちゃん(5)は、刈り取ったばかりの稲を抱え、「重ねるのが面白い」と杭の近くまで何度も運んでいた。

集まったのは地元の農家や小学生のほか、県内外の消費者らでつくるボランティア団体「グループ農夫の会」、モンテデイオ山形のスタッフらだ。

荒れてしまった棚田をよみがえらせようと、2011年に結成された「農夫の会」と地元農家をつくる「中地区有志の会」を中心に、コメの生産から販売まで役割を分担して取り組んでいる。活動は6年目。今年、再生した棚田は約2.1畝に達した。

J Aやまがたも技術指導

稲刈りと杭掛け作業には約100人が参加。町特産の豚「舞米豚(まじまことん)」を使った豚汁も振る舞われた。9月17日、山辺町大蕨

や販売面で協力した。山形で開発されたが、県内ではあまり作られていない「里のゆき」を栽培。モンテも「モンテ棚田米」としてスタジアムなどで2.1600円(税込み)で売ったり、選手らが農作業を手伝ったりと、貢献してきた。

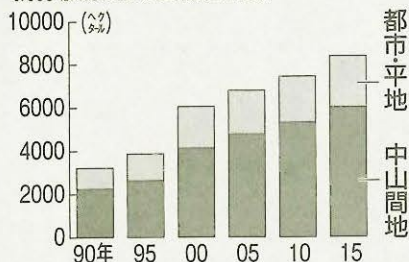
耕作放棄地7割が中山間地

そのかいあって、「モンテ棚田米」と、カタログやインターネットで販売する「山形県大蕨棚田米」(2.5税別2500円)の販売量は1年目の1736.5から昨年は800.4に増えたという。

「大蕨の棚田」は1999年に棚田全体(約16.9)のうち、3.4が棚田百選に選ばれた。だがその後、棚田は減り続けた。傾斜があつて大型機械が使えないなどの条件に加え、少子高齢化の影響もある。99年に89世帯314人だった地元の地区の人口は、14年には77世帯240人に減少したという。

また、耕作放棄地の増加は県内だけでなく全国的な問題だ。県などの調査では90年に約3200.0畝だった耕作放棄地は15年には約8400.0畝に拡大。そのうち7割の約6千畝が中山間地だったという。

耕作放棄地の面積と内訳



大蕨の棚田では、栽培する品種を厳選し、モンテの人氣も借りた。コメの売上金と農夫の会の会費を収益源とし、事業費や農家の労働費をまかなっている。元J A全農山形職員で、農夫の会の稲村和之代表(66)は「棚田は大きな機械が入らず手作業が中心。だが、その手間が価格に反映されず農家は苦しい状況にある。再生事業の継続には新しい発想で挑戦することが大事だ」と話した。(井上瀧)